

# 周作クラブ会報

(第38号)  
2010年2月28日発行

周作クラブ

## ◆主な記事◆

- 巻頭エッセイ (1面)
- 新年会報告 (2、3面)
- 遠藤文学翻訳者委員会 (4面)
- 「原稿発掘」 (7面)
- 投稿・わが思いの作 (8、9面)

巻頭エッセイ——「周作クラブ」10周年に思う

## 20世紀最後の年に文学館と共に出発

会報も今年40号を迎える

たかはし ちはや  
高橋 千劔破

### 10年前の第1回の集い

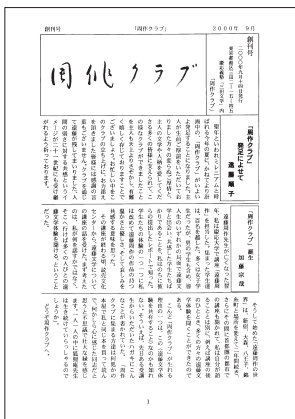
「周作クラブ」は、20世紀最後の年である平成12年(2000年)の5月、呱呱の声をあげた。今年で10周年ということになる。

一口に10年というが、小学校を卒業した子供が、順当にいけば大学を出る歳月だ。2000年の9月に「会報」の第1号が出されているが、今年の8月下旬発行予定の号で第40号を迎える。3カ月に一号の割で、10年間とぎれずに続いてきたことになる。

西暦2000年は、長崎県の外海町(現長崎市外海)に、遠藤周作文学館が開館した年でもある。同年5月、文学館のオープンとほぼ軌を一にして、「周作クラブ」が発足した。代表世話人は加藤宗哉さん。加藤さんが、東京や神奈川の各地で開いた文学講座「遠藤周作の世界」の受講生が中心となっ

た、いわば遠藤周作のファンクラブである。

遠藤周作没後(4年目)にできたファンクラブというのも珍しいが、7月下旬に開かれた第一回の集いには78名もの人たちが集まった。「周作クラブ」の名称が決まったのは、このときである。それから10年、会は発展を続け、何と現在の会員は500名を超える。文学館も外海町立から長崎市立に変わったものの(市町合併による)、順調に運営されて今日に至っている。



記念すべき会報第1号

### 会報の役割と会の精神

記念すべき会報の第1号は、B5判4ページ、ささやかなものだが、始まりがなければその後はない。編集人は小松捷利さん、編集委員は岡田厚美さん、神谷恵子さん、近藤恭弘さん、秦文平さん。岡田さんと近藤さんは今も委員である。

A4判になったのは第2号からだ。高橋が編集人で金子コウさんが副編集人という現体制となったのは第6号から、体裁が今の形となったのは、第20号からである。

ともあれ、今日まで会報を出し続ける努力によるものである。また支えてくれる読者(会員)がいたからに他ならない。自分もその一人なので恐縮だが、種を播いた人、育ててくれた人、今も畑を耕やし続けている人たちに、改めて心から感謝の意を表したい。

500名を超える会員とはいえ、新年会や遠藤文学の旅、周作忌など会の催しに参加できる人たちは、2割に満たない。あとの8割以上の人たちと会を結んでいるのが、この会報だ。

遠藤周作は没してなお、多くの話題を提供し続けて今日に至っている。没後も著作が売れ続けているだけではない、いまだに新刊本(重版や復刊ではない)が刊行され続ける稀有の作家である。遠藤文学を読み解くセミナーや研究会も少なくない。若い読者や研究者も増えている。ふしぎなこと、い

までも埋もれた作品や手紙が見つかる。そうした情報を、いち早く遠藤文学ファンである会員の皆さんに伝えるのが、会報だ。

もつとも「周作クラブ」の会員は、遠藤文学ファンばかりとは限らない。遠藤周作と親しかった作家や文化人や編集者、いまや伝説の劇団となった「樹座」の旧座員たち、ヘボ碁を競い合った「宇宙棋院」の元メンバーの人たちなど多士済々。遠藤ボランティアの人たちもいる。

「周作クラブ」の精神は、遠藤文学を愛好しまた研究もし後世に伝えていこうということだけでなく、遠藤周作のユーモア精神や遊び心も伝えていこうというものだ。皆で集って楽しむことができばいいことではないが、会報の紙面からも、充分その精神は伝わっていると思う。

ところで、冒頭の10周年に戻るが、今年の8月下旬発行予定の第40号および、9月29日の総会(周作忌)は、共に「周作クラブ」10周年記念である。記念特大号と記念イベントを企画中だが、ぜひ会員の皆さんもアイデアをお寄せいただきたい。

さらに10年後、大学を卒業した子供が、場合によっては小学生の子供を持ち得る年齢となる。そこまで元気でいられるかどうか覚束ないが、遠藤文学が読み継がれ、会報も続いていることだけは、まちがいない。

(周作クラブ幹事)